

時代とともに変貌 産業の歴史を語る 枚方家具団地（枚方市）

著者	大西 正曹
雑誌名	日本経済新聞 まちかど羅針盤
発行年	1998-01-27
権利	(C)日本経済新聞社 このデータは日本経済新聞社の許諾を得て作成しており、無断での複写・転載は禁じられています。
URL	http://hdl.handle.net/10112/7272

まちかと羅針盤

198. 1. 27 日経新聞

● 時代とともに変貌 産業の歴史を語る

枚方家具団地（枚方市）

淀川と生駒の山々に囲まれた枚方市。古くには平安貴族が狩りを楽しんだ、自然に恵まれたまちである。御殿山神社や渚（なぎさ）の院跡など、歴史のにおいも漂う。

江戸時代には京街道の宿場町、淀川水運の要衝としてもにぎわった。それが現代に大きく変貌（へんぼう）したのは、昭和三十年代から四十年代にかけて、国道1号の枚方バイパスが開通してである。東大阪や門真、寝屋川、守口とともに、工業団地用地として一躍、脚光を浴びた。

中でも大阪府の中小零細家具業約三百社は、大企業との競争が激化する中、組合を組織。一致団結して、バイパス沿いの広大な敷地に枚方家具団地を造成した。

だが、昭和四十八年のオイルショック以降、風向きが変わる。輸入品や大手メーカーとの価格競争で、製造から販売へ転換する企業が相次ぎ、製造団地は販売団地への変貌を迫られた。危機感が高まる中、家具業界を触発したのはロードサイドストアの興隆だ。バイパスに直結した地の利と集積を生かせば、生き残りは可能だ。そして、あらゆる家具がワンストップでそろう地域一帯の大型販売業へ脱皮していった。

多様なメディアを使った共同宣伝と街並み整備。シンボルマークの設定や、カグニティ枚方としてネーミングの統一と次々に手を打った。

郊外の大型ショッピングセンターとの競争に破れ、中小零細の小売業が街並みから姿を消している今、家具団地の試みは閉塞（へいそく）状態に一条の光を差し込んだと言える。

（関西大教授 大西正曹）